



七部集大鏡

猿蓑四



猿蓑

ひ左古

續猿蓑

猿蓑

信濃伴九撰釋

飯詰の集はるる古今ふわり  
愚考輯文曰人不通古今馬牛而如襟裾  
をいふとく百人一首を並べりあもその見振  
あり巻改を食なり殊もる天智帝を  
格別の沢ありよけり巻軸を慶帝を  
うら住の山製なり二を女帝よりて夜  
なり宴ふ夜食住の三つを人とく上  
なる事大切のりあもるさきこくは  
さて陰陽合体一衣食住の三つ備りぬ

ハ意の歌なり殊ふ人丸を相飲の巻よりて  
人及の大事人情の實次ふる花より月  
雪の巻終是又我邦の大事なり殊ふ如  
歌の二層とすなる赤人なり於此の  
沢もあり一をさきとよはれあり一を  
よ及ふ所を志すこ飯詰の集はるる  
むとあり一族此境第一の味す金一と  
その古今ありて伝達の書ありて古  
今ふわりて其を解くくくむあやふ  
一をりて今を解すくくいふをりて  
古一を解すくくく又歌号を一  
部の意標もるは是又むて大切なり七  
部ふ五義の沢ありよけりあもる一  
は意の歌なり起一きこくは

一書曰凡拳白集大相可好才を多し大匠  
の如く其材の老しつもの思ひし守り  
はるまじくはら守りせよ其も守り無きよと  
ありんかむ謙し月花もおもておるよ  
手つ付るものや

不変此変を去るし心

愚考いり凡流りすも正徳の根をうこ  
くべして正徳あり終極の全うむおそ肝  
要の事とあり

五徳をいりよ及ん心をとらるし

きこまらるるなり

一書曰兵法は將の五徳あり不倍後剛法量  
度をあり 一書曰徳之曰徳はつる連珠  
の如し五つあり多しよのしつらるる

信徳を有する者二自謙し徳りても  
をりしきる者三ありあつて無きを信す  
る者四曰初心の事多し其を之して初欲  
の浦る者よ心をよせ徳りる者五集教  
古事、来歴文四るものよ一白よ其無き  
る一徳りるものよ引よせつて附徳る者  
是五つ徳るなり 愚考五徳をいり  
よ及ん心をとらるし 書りより  
りやりの徳りるものよ其徳りる者  
えり勝るものよ事やうよ書りて其  
者一信徳を有する者二自謙し徳りる者  
三あり其徳りるものよ其徳りる者  
とるもの徳りる者四其徳りる者  
自謙其の集あり其徳りる者五徳と



よ云様子の集の序 吾子々をとりて  
字もろの藤の摘るりは又の書とるか今の  
人し物と見えあや 愚考 志をめぐ  
翁の自筆と彼小向雲竹とをよひあ  
てと書きさうしうひる

初志ら小様も小表を不しと云

古注よ曰定家卿 徳とめて書らばお井の  
ひらひえ不しの不しと云さうり此歌をよ  
よん推居士歌鳥帽子とりよりのをよ  
て小弓を射るるなり志のらんを町家の男  
志をよをよねて小弓張を思てよよのよ  
るん翁を志をよて様の人志といひ  
るひのよハ小表をよ不しと云る人といひ  
らまひらるん

阿志はゆと町るる夜の静のよ

一書よ小表のよをよ集の父みしては  
白をぬるり次ししの白を産出するり  
阿志き上げと心とめし静の静を姑  
蘇城糸のよやとせとるよ三井の静と  
きつこえつり

阿志き上げと心とめし静の静を姑

一書よいそを湖氷よ物魚よ一各  
知と夫古人の云湖多ふりて我よ  
歩人々志をよげぬく涙田れ橋

愚考 金葉集歩人々ひえ山おろし志のき  
来て志をよしよぬ田れ志橋志の歌を  
深歌よりしてけぬくと初ひらら  
悦語と志の志余の橋ようこりるの悦こ

廣澤やひとり忘るる 混を序

成美曰詩經名物并解云、に戸とニクと  
一名又マタラウと呼ぶのちり此又流るる但  
眼上流白條あるを異とす

か一人ふぬりきてきしとらまは

は今の流るるしししして元ふとくは 五芳  
日出しぬのまてきあつるるり 宗人を降  
らふとすのゆふ 津田一とむとのゆふを  
か一人を降るぬとゆふゆふあまふまは  
志るまはるをとりゆふ白く

るはししやふらふの隨の一志を

一書ふ伊賀の境ふ入とあまはるる  
きしもの昔の糸は初をとりまはる  
るるりて竹田の里やゆりしれ

一書ふ山城の木懐の里よるるあまはるる  
そゆく君をゆふえは歌をとりしる

初書ふゆふゆふゆふのゆ

一書ふ能狂言うは不猿の歌行ふか  
中しるるゆふとたよりそ答ををまはるる  
あまはるる

くゆの雲ふゆふゆふの星のあ

成美曰朗詠集 劉元寂 北斗星前横  
旅馬南樓月下擣寒衣 敬齋曰冬棧  
活法ふ曰南極老人朝北斗又前五折志  
ふ曰北斗ハ人君之象也と又論語ふ曰  
為政以德譬如北辰居其所而衆星  
共之  
一ゆふゆふゆふゆふのゆふゆふゆふ

芝山曰五雜俎曰百草不畏雪而畏霜  
蓋雪生於亦云陽位也霜生於陰  
位也

禪 ちの松の落葉や神無月

愚考神無月之俗習るる  
十月と書きてカニナツキ西京雜記曰十月  
於卦為坤恐人疑其無陽故特謂之  
陽月所以見陽氣已萌也又本朝諸  
神出雲の大社よ集るゆへに神送り神  
迎神の儀あるといふ

西古のるる野中の松よ十月

大節曰夫木集夜坐右大節野のるる方  
枝の萩と志りのりてありてのるるよ枝  
そく通しゆく

浪抄をるるめて通り十夜もの形

愚考十夜を傳つて云伊勢守貞國と  
りよりの美友をるるりてを感し去  
如堂よりして始て初み津古宗孔意式ありて  
十月六日より十五日までをりよ又俗よ十  
五日を急弘丸ぬといふ

葉の花や不るいんるき美屋女

成美曰傳灯録曰美照常製竹灑羅  
賣以供朝夕麗居士將入滅使美照遽報  
曰日蝕居士出戸觀次美照登父座合掌座  
亡 愚考麗居士治録曰居士將入滅謂  
美照曰視日早晚及午以報美照遽報已  
中矣而有蝕也居士出戸觀次美照即  
登父座 合掌坐亡居士笑曰我女鋒捷



矣是延七日化云々さて是斗て茶の  
の花やといひてはたの志まらぬ一説も美思  
女を醜なりしりてはたの志まらぬ一説も  
白の志まらぬ和事始ふ云陳晦伯之天中記  
と曰九種茶必下實移植則不復生  
故聘婦必以茶為礼固有取也  
あそて家伝遠まらぬの丹やげを茶と  
てりなり是女を一皮嫁しては必二夫  
よ思ふはといひ約ふ茶をてりて礼とす  
茶も実をへては二皮移植り  
けり必枯りたりなり美思女を父よ陰  
禪ふ所なり一嫁するなり勿論列女なり  
をまはれり要らむといひ人のるきを  
んり人るきとては終ふ終りなり

一皮も嫁をさりては花なり一皮嫁するは  
実なり実も茶の花やの字えまらぬ  
の余此越人の為まいはれも勝を被る也  
又年を病む

表出れ茶の花ゆへおまらぬ

愚考 後多の相院の地付と云や西の系よ  
果なりよまき梅の字をまは内よりその梅  
やいよまき梅の字をまは内よりその梅  
詠す初る事六はいよまき梅の一首の歌を  
をといふとていひてはあはれ帝は歌のなり  
一くつをまはれその止りなり伊歌披露  
集に見ゆゆへよまき梅とてやれり  
比古よりよまき梅とてやれり  
あはれめりてはみのおむ

くして華の花少くふをくらまざるをやと  
有り家も多ると多りの別言なりをを  
有

そのまき牡丹の花の美 裸

愚考因機法伝ふ冬牡丹の侍 顔色却  
因風露深英華不畏雪霜欺

賦日ま色ゆくうん女子い

愚考雜五行書曰十月亥日食候令人無病  
又亥八十二ヶ月小子をる守りのまき八女多  
く福入と云く又大成経小曰亥月得亥天  
照太神幸魂大神復後智恵も乃天地  
冥鏡已降初地宜以五色解并五色  
幣及甘辛酒五味菓等 滅糖桑之國  
尺皆消國後悉殺と云て類聚國史曰

用化帝十月 但列より初て餅をを執す  
婿の亥有まきハ十一月よりあるあり焼  
る餅といふん 類向よりして 賦日ま色ゆ  
くと多焼の字ふ力あり

非違水口まの言の於

愚考杜荀鶴の白小歌 吟於音 夜  
過山といふるをりて 法もら山ありての  
吟ありる必定有り 禁秘抄曰 件於大  
有奥物也或六角或八角云々 一書ふ水  
口 兼源寺の僧 雲月 報日 非違ふ 遠坂の  
同ま出るといふるを非々 存人より  
賦日ま色ゆの言 赤拍

一書ふ此の雲月報日と 福書あり  
春夜抄ふ 雲月報日如 燈の非一 倍街

梅の用形はよき交る善相を由りと有  
赤梅も七梅の一種あり又阿うう梅と  
りし一書よ神供よすして梅を飾る  
る神居の古例あり梅を太神宮持の  
梅忘平五七具時よりのなる三角梅といふ  
玉書よ形して善交る善相状を色  
梅を由りる一社の習ふあり 又連袂  
匠技集ふ神供八平手よ盛とあり梅八  
枚よ盛るあり又三角梅といふ有天満宮  
よして梅をとりのあり入浮ハ吉あり沈  
ぬるありあり梅といふを我傳よる七梅小  
愚考ありし梅の傳六梅の傳合て十三梅  
ありはるよ由りて不申るよ是ハ畧す又

土具高ハ土貢高あり二説有二見の東流  
良島よりとよ云とてを梅の浮沈の事  
内大臣家良公神地也并はの梅のうき  
高の并同よはとてしめり袖の事是を  
の注釈皆ありし梅の事斗を解て白  
れをを解きん天満宮太神宮の解此  
のよる不申こ 成美曰増山并小美日  
教自小豆飯を由り示宿乞を赤梅といふ  
愚考膳よありの并よ魚肉ありし雲の連  
て兼ありし只赤豆飯よ付魚の物汁  
といふるよ必定あり又同書よ契沖云  
うしよる形して紫をりよは紫葉よも  
りよるし赤飯をうしよるありの赤  
子をよむて赤梅といふよや云

ある月の水を種よや有仙苑  
静る日曰六月土用申水の仙の根を洗ひ  
しして梅の樹を花格別にをて  
と云く一後よ土用申よく日小初して  
梅のをよしとすしりよ

尾既の心よりとるまきし海氣の如

空味堂曰海氣の口をさるまきしもの如り  
を天細女命其口をさくとしり  
愚考尾既の心よりとるまきし如くま  
きしめ向家よ海の氣とわく少小氣  
を字眼ふしして一ととる  
乃らふこよま其の考を如のまき  
愚考の多其の考を舊事紀曰決列多其の  
出現ありふ伊特諾尊近に

那八回本

よして日少高とやなる中仙居の通り  
留よ大なる石の考を立

住はくのぬ旅の心や蓋火 楳

業叟曰夫才集正二位季統よりまきし  
りのまきしてゆきし旅やうとすしはまきし  
まきしものよりとるまきし火焼ふすみつ  
の五文字ちりしをるる

門前の小家も何なりとるまき

愚考易よ白雷在地中復先王以至日閑  
閑商旅不行后不省方之は日身を安  
し骸を静ふす又百友万事を強て  
改を字以是を五強通義白虎通亦の  
畧又るなり又年中行事よ云冬至を  
一陽來復して陽氣初て至りとき

るまは身を勤まらんて微陽を養ふ  
 一又奴婢を養ふ事ありて又追思  
 録曰冬至祭始祖冬至陽之始也始祖  
 厥初生民之祖也冬至を重んずて大切  
 の日ありまは唐古よりて元日よりま  
 祝ふといひりされは日本の事あるは小  
 家も持ふといふは又江家次第  
 一曰冬至の祭を重んずて神武天皇延暦三年  
 年十月己丑天皇大安殿より出御あり  
 て冬至の祭辞を受とりしよりて又和皇  
 冬至を禘の事ありて桓武天皇延暦三年  
 十一月朔日始てありしよりて又和皇  
 祖を免さるるとありはその事ありと  
 又後和天皇貞觀二年十月を小なるを

大しありて十一月朔日より冬至を操り  
 て祝ふ事ありてあり彼赤松の白の詞書に  
 雲月朝旦とありまは冬至ありて  
 ありて朝旦の旦の心よりて書ありとあり  
 一書曰交田の野や浦のるるまは  
 考よりて桑入てありて余吾の海  
 成美曰余吾の海を過に伊奈野湖水の  
 岸よりて一里ばりり入りしる山のふと  
 ありのやうありありとありとあり  
 此桑戸や溪のさうまて冬至の日  
 去夏抄より冬至の月雲の月並にひける  
 より先師冬至の日より冬至ありとあり  
 柴戸とありあり出板の後大津より先師

の久し業の戸も物もいかにあるもの  
不考逸る一白も大切有り後合出板  
よおよひも改一きよきなり 漢物曰  
手家物語よ福原の如より徳大寺左大  
将実定卿曰如の月見えむとしてよの多  
て惣門をまきこころをまは内より女の  
聲もして誰そや蓮せの露おそらよ人  
る事よふもと咎なきは是を福原より大將  
左の山のありといはず左の惣門を論  
のうもよしてさういふを東のふ門より入ら  
ざるよとすなりす 愚考秀逸を一白  
大切有りといふもよきなりふらと盡て  
如合せりよや 高蟾の詩よ重門深鎖  
禁後後月漏 驪山宮樹秋の侍も叶り

静さうと教珠もおのりの細代也  
愚考の資有り行物記よ曰珠数の負一百  
八七表百八が、悩一磨轉之別成百八号仏  
悩悩号善抱也又手黎曼陀羅咒  
經曰梵僧よる之鉢塞莫と云又經略  
云摠子後千倍蓮子後万倍水精後  
子億倍善抱子後五量也又大福曰六  
根各具六根六三二十六根也是配過去  
現在未來 二世合百八煩惱也  
勝突よりこころの多る數多  
成美曰勝着る小すの縁はきく物  
るり又非る名目數聚抄よ云載る八  
角の蓮よ縁をそるるのそり云々  
雪ららや穂金の芒の菊残

一書よ小村山系を七月廿七日芒を  
めて以後をを遠るさうかふよ徳金の  
神よりともい入歌よあらや山田の野  
のむく芒菊人歌一よ歌ひ成のそ  
よあまるとい裁美曰撰集抄小曰浅弓の  
あけよを煙の中心をてくまのなるはう  
さるは信濃のの不やのすすさよ雪らりて  
十葉ふま色の野をのかりけ 公石曰  
信濃清新山よはりよを芒よてらみと  
のを遠るそのふ人のををさるのやと  
多葉芒の穂よて遠るこ信留を信濃  
の一の宮健伴名方部下の社をト恩  
娘よとて後信よ小在の神よりといよ  
る方の寅年一申年よて七年めしこ

関東の人此年よ婚礼を臨らば寅ハ子  
里初て子思なるの義申る文字のひき  
よりしはといよ信留るり程との奇瑞  
奇蹟あふとも略す

赤子紙よ曰此白師の曰心の味をいひとて  
むと数日腸を忘るるとるり支考曰空  
也と空往るを枯木を岩の親あるら  
空往るを夢中の糸吟をよせ空也ハ  
き夜の修行をむすよ夢中の二字を更  
しよて瘦の一字を互思の格を當りて  
一書よ夢中を歌よて是よを各を  
あふすよ小往と空也と純向一更よその  
物を恐るよ空也を夢中よせ住候し

丁 鞋を喰 履くらさるまの室小たいて  
瘦の一字を喰くらさるまの室小たいて  
すりよまを喰くらさるまの室小たいて  
字を喰くらさるまの室小たいて  
一ツの内字を  
喰くらさるまの室小たいて  
瘦の一字を喰くらさるまの室小たいて  
双関ありて互思ふもの考う後得る  
愚考兼喰ふもの切喰くらさるまの室小たいて  
次を喰くらさるまの室小たいて  
食也上人を喰中の苦初を食て一と  
まを喰くらさるまの室小たいて  
心又喰くらさるまの室小たいて

空也の身平貞盛とりの二代を嗣  
て貞盛法師と号し始て五劫の三昧  
湯を喰中し巡行し飄を喰らし若  
行を喰しと有り又茶釜を製して市朝小  
賣るるもの後のもや

夜神樂や鼻息白し面の肉

愚考神祇の食るまの室小たいて  
りへきを喰くらさるまの室小たいて  
住吉社を神功皇后の天皇の天子  
及將軍を喰くらさるまの室小たいて  
余度の大を喰くらさるまの室小たいて  
百餘十石ともや

弱法師我門けせ候の札

一書ふに戸の所食るまの室小たいて  
札といふものを書て食るまの室小たいて



とくし強弱をりその孔の家のてお世の  
の分りものををたハせるとるなり

くまをゆく年のまうけやいせ態也

愚考いせよものる年等の同先法固より  
系譜する事多き事ハうくひて是支那勢  
多垂仁天皇十六年丁巳九月十月甲子渡  
令郡守治五十流川上又迂くあること  
凡内宮と稱する事多村上天皇御宇  
祭主公第の時小皇太神ハ真をるるの  
少くは内宮と号す亦又とる事多るなり  
ありしより祭の所豊受太神雄略天皇二十  
二年戊午秋七月七日丹波國余佐郡志  
井系より今の山田の系より近くありて  
より曰ハ八十四年後なりと云く又態也

多日本紀曰神武天皇五十八年紀國必  
出現伊弉册之本又云崇神天皇六  
十五年建之新立を景初天皇五十八  
年建之態也を文政を二年三百余年  
有り法祿の年月又同ありて區く有り  
也を撰ふる事いさむけよ也

一書ハ新改れより一き雲并るる也  
不々々々す約ひきむけして多々  
愚考也を撰ふると多東西より引ひけよ  
とこ異列一ト向の時多連ハ北をさして  
多そのるる多連ハ東西より引ひける  
を撰と云南北を縦とりり東西の短  
南北小四十歩云々  
云々死多家塚てるむげなく也

愚考王維の「為小云官榜祭酒客山  
 太女郎祠別後月明月君應聽子規

詩中依老いはまるとも國秀の事なる事ハ  
 一入をうしくまそを松女巽刻を新古今  
 集に於て貞享の改の名妓ありては神  
 え鑑の六歌仙といふ事ありてその一人なり  
 不謂巽刻唐士和函六橋小太丈去也

松島一入の附ふるものなりや雀  
 の毛衣とよめありてまじハ

松島や 髻ふおをてのまじやくきす

抄事曰「空んおふ曰祜盛法師 せき夜のふる  
 とりふをなしてふきやもあそり 髻の毛衣  
 とりふを誂しうきまハ人しめし  
 りるなりやあそふま是といふ人けりんか

抄る但し一才法何なるかといひたりたる未  
 とよみよりなりていひひのたうきまは  
 ふとをふてやみまなりと云く髻ふおを  
 うりて松島を誂しうきまと有りまて未  
 そす法をめめと云く 書り小髻ふ  
 のりて揚刻しを誂しうきまといふ古きりて  
 なくしうきといきこの邊りの侍らむはるる  
 才とてのまじと時をふり知るなり

愚考乃慈母のりる家礼に曰慈母謂庶  
 子無母而又命他妾之無子者慈也  
 同親母義服齊衰三年又名教小曰  
 嫡母終母慈母養母庶母乳母合曰六  
 母又能与他樂心一名曰慈家礼に曰是

母又能与他樂心一名曰慈家礼に曰是

小出母塚母を令せて以上八母と云  
多ふあられぬ花を牡丹の姿りま

公石曰まろろの花を卜よりあはるきく花を  
の花を上よりあはるきく陽気のちるす  
たはるきく又格別なり牡丹の大海下  
より咲のあはるとりま多ふあはるきく  
とりのり

智恵のあら人も多きなりと云  
愚考名義集小曰決定審判謂く智造  
心分別謂之也也そのあはるきをりま  
るへ

井のまろろ水清し清し 牡丹  
一書小曰清しと書換りや新し清し  
と云 愚考漢書抄曰於梁縣有小山

山上有水清淺其中生藥竹林和諸り  
水新横斜水清淺又楚辞曰石漱兮  
浅く飛龍兮翩々此依例を以てと知  
一やろろ清し清しなり

竹の子の力を終ふと云ふとき  
成美曰豊國の神を方度ちの境内にあり  
大園考古ををあり覆醬集小大山歌  
豊國神庭壁云零々東山古庭郭  
蒼苔蔓草上類墻英灵飛散無  
巫祝秋月春風似主張

竹の子や畠隣小悪太郎  
愚考要た部をた部をくはるり二月を  
た部をくはるり一應仁心恭未  
任なるべきものをた部次部と云

鳴く小呼つきさうりとりさうり

靖 壺やとらるるまをまの目

元紀曰靖をえらむとて靖壺といふの  
を法座よけり一は靖の性よくて壺  
ののりしてその壺中入て壺を引より  
めたらて脚と形のものなりといふ也  
愚考拾遺集よまの夜を浦島の子  
の衆るま也とのめくゆてくやしうり  
らむ又監令婦よそ好くたのみのり  
たまの夜のえもそめまそはうまうり  
なり

君り代や飛十 糸も 踏むとら

太師曰近江土坂田歌 瓶テの社よ日月  
形よ小神事 何り昔年をたを案の目女

そまうり男の敷ふと踏をみよいしてき  
被てわたりなりとるり 踏遺集此歌よ  
通にるり瓶テの案りといくをまの目  
るまの人の踏の敷といふ

糝ゆいふと白ふとと心 額髪

高子紙よ曰糝髪 撰の時去来り許一  
よおくらまはしたお後めの案よ一集よま  
何りまきものといへ書たなりといなり  
愚考源氏帚木の巻よ君の心を何  
とままのりなりものくらあやうい身をそり  
りよよみ民の額髪をとりまてさうりて何  
へまう心不そままハサひそみぬ又総角  
の巻よまうし後まらまら尺歌よ歌髪  
を引かけはくいるとりをらり歌つとら

まゝ採る異苑と曰 屈曲ありあるふとの  
蜂の尻らまのりものありと 七元と曰以  
蕪葉を覆指葉を採以象 陰陽相包  
覆未分散也

交子や兵とすあまの 詠  
一書ふる敏る養種を養花の味添るなり

今も羊畑よりあり 斤用龜井撃尾等り  
我死の初より小松を結て昔をのりす

這出よこのいやう下の 堪るの障  
法住皆云このいやうの蚕畑よりありと

砂ふそのうち香火を 兼火を故火を  
よありは仏徳を後するものなるは六句を

ありといひあり 此のありはさるるいひや  
ありあり 愚考清浦真善抄本を説く

抄ふまうしにけりとき 初秋八句垣ふ蚕畑  
ふ蚕といひの歌 眠の周梨の袂ふよりと書  
ふも大ききるなり非るなり 六百番歌合の時  
歌眠法師より并出さるるも 業名目より  
て依例する事ゆへに 止ぬ歌多の  
自ら并出さるる事より していひやう下  
もこのありるなり 左衣の新陳略す歌  
眠の障ふ云ういひやと といひやうの義  
ありを中よりいひなり 蚕畑より蚕を  
いひやといひなり 下の下 陸蚕をとらるる  
ふらぬに抄なく ありありなる人古民も是  
をこのいひやと 判者後成卿の云先いひ  
やの下の歌を万葉よりいひえ 傳りをある指  
有とをすしきるなり 竹葉歌集のいひやの

あるく、蟻塚に入きく我あひのめやま  
らの歌のちるるを山田の庵ふ田をちる  
子等あとの住宅を歌あしして山中ふ令  
存のり蟻の序をてつてあはれおこさ  
めとちり心おけゆりの歌るり又このや  
といふも彼庵の下ふ火をて人ゆりし  
煙を多りししめて或る荒坂を排ハ  
しめ若く猿遊麻をと去らししりるり  
ありのを故火麻火りのたつてを彼令一  
両義といふとも煙をよもて一決しりし  
今の同若うもを重田舎ふ蚕を知ふ  
ををとりひやし稱ししつふ山墓ありの  
て蚕をとら入としりし中糸已ふ不定の言  
の蚕養の登をとく蚕室とさるやしり

是則後形終の書きてゆりありの  
凡蚕養の法正月神子日ふ午年生  
しり女子をとらひ始と稱して蚕室を  
きとらひ移ひ初りるり次ふ二月年の日  
神て蚕のさねをわたりて暖日ふあしめ  
て三月年の日ふたりしめて葉ふはをち  
て五月をちゆを引時とすともち、あは民  
をちるとりありの蚕室の内ふ物をちりあ  
き墓をを衆入ししめむや斜ふ蚕室を施  
ちとらしむしし況や蚕養の室中全渡渡  
極つる文あ地流の津を流ししりあ  
りあつてこのあ任をちむつきや凡撫墓を  
本自養水色あふあ任すりありの有り  
然ハ昔の恵帝墓をけししそ花林苑と

見たりてしり橋渡なう燈を詠しし井出の  
里をせしむり漢家本朝歌暮の吟も皆  
田苑水津有り彼一頁を葉の歌を山中の  
田の庵香火屋々下と煙鳴るるをわお叶入  
るり有り歌を詠ししり入も夜煙の洞陰も  
律一ちり影を山腰もめと山も不足し  
よりしてわ彼歌よりおりるもの有り右  
の人蚕養蚕の葉を發守ししり  
洞をを發ししりしりしりしりしり  
卿と歌詠物園梨とを園の見方有り  
遠坊院の歌古系大吏歌脚卿の歌も  
して後成卿も初る歌を發ししり  
一字よりしりしりしりしりしり  
ときしりしりしりしりしりしり

を發して詠ししりしりしりしり  
を彼の影を目する連ハ止るるを  
詠ししりしりしりしりしり  
歌詠の云はるるしりしりしり  
例するもこの信ありしりしりしり  
を垣よ歌詠の説として出せしり  
の愚人の迷ひしりしりしりしり  
すりの愚有りしりしりしりしり  
まがしりしりしりしりしりしり  
このいやのしりしりしりしり  
をたしりしりしりしりしりしり  
るりしりしりしりしりしりしり  
よりして心ありしりしりしりしり  
文玉割らるる

此後ともいわくつらなうとす  
おとくのりよも

つらなうのりよも  
赤子子みらひやつらの云書は源氏源方の  
巻のうちをほみするものなり蔓延と書  
句會曰連續之見也と云く 一書小莊子  
よ曰有所謂蝸者君知之乎有國於蝸  
之左角者曰觸氏有國於蝸之右角者  
曰蠻氏時相与爭地而戰伏尸數萬  
遂北旬有立而後反

五月るふ家つらなうとす

師尹曰説文よ曰附螺脊負殼者曰蝸  
牛無殼曰蛞蝓本草よる陵螺と書  
了剛爾雅よるはつらと訓す

一了士の謂次あるり五月 雨

并地曰忘るふををまのち〜付て有て  
るれ一字よて台とを〜な〜むこのりよも  
らハ能潜るなり〜のを

是もやいはて五月のぬりのる

愚考 亥方中特の事跡ををの目小虫  
つら 寂わりの形く無別 翠よて此の字  
を疑ひるり 是もやいはてこと台を切て  
五月のぬりのるると二切よるおつら  
るり夫木集よ五月るる系野のる  
よあみちしていはて三河の沃のハッ橋  
る〜の意味よるはり

は〜るりよる〜坂や五月る  
は〜るりよる〜延後あるり〜料ハ



代るの思ふ錢るの二字とよ一考と  
 日の名や葵くくくく五月雨

一書よ五月當の思ふはまゝあるべきをその  
 日孰も思ふは 松が花のふるきふあひ  
 のりこりきこりるを思ふ一して日の名を  
 兼一とるとりて 葵といふ葵といひつるを向  
 日葵一名文菊又日まのりとりよりの花の  
 葵を日よ向といひしるをた建と有りた  
 俗曰葵能衛其足 成美曰くちありん  
 をとりわきとてみえねとも日の孰あま  
 くありてくくくくらむそるて 葵本の心  
 とをたわえん 愚考尔雅曰葵者揆  
 也葵葉傾日不使照其根乃智以揆之  
 是の弁合ふ子たのけや麦畠

大分印日流流日記よ十日流流流のやうり  
 思ふと相取尼有の去及途中の吟とそ  
 うく不震有りの流力よゆ流のやいさや  
 流のけめや葵の田植う

一書よ猿樂能大支家よ流流といふ流  
 のの十八等なほ有り同く狂言よ田  
 植歌とりよの別よありそらのをり  
 ありて只流流のけめこの并りよあり  
 ありていり一節を上演よりういひ流へ  
 一節の始を流のけめくの田うそ  
 ういひの流りてういひをいひとそそ  
 らくゆりく直流るありとそと葵せ  
 ありや一白のありて能を大狂言  
 呼めういひのより出を流のりひ

座をうらふそのつらさをうらむて通曉する  
やういふ白紙りるす玄妙あり一書いふ云興  
の田植歌を昔生仏と云盲法師の依りて  
人よんて一ちりとし愚考兼好の云後冬  
掛院の浄宇信濃兼好の書入る平家家の  
つらさを依りて生仏といひ盲目よんて一  
てりてせきりの新長を吹徳院の依りの  
友系宗行の兄りて詩才のり晩年比  
叡山よ徳方時代いづく有る心直注の是非を  
とくく

眉拂を面敷いしておの花

一書いふ眉をさきとて子れ名信よるをさや  
しといふ薊の種取るりりしをさきとて婦  
人の粧具りて太女帯いふ女帯るるといふ  
此花の歌いふ似るゆへの名よるしあの花の面敷  
いふをさきとて一説いふ花上をさき花の産  
物多きゆへは佐あり近代産物角力合ふ  
大國花上のお花とあり

法隆寺の因帳南無仏の太子

浄禱のばらまきる花の太子

愚考推古天皇十五年龍田の神の教ふ  
よりて聖徳太子の草薙あり太子二歳  
の時二月十五日東方よむくひて身を仏  
と唱へまよひ手の肉よ新迹の左眼あり  
しといふや毎日手刻七の禱りておれをゆ  
るありし案武部南無仏の舍利をいせる  
七の禱りてしとてまよる人今も双調又黒字  
紙入曰或事大和の法隆寺よ因帳あり

その次子子の冠を見落し一節のそて後  
の因幡よまのし越まのりさりさるる代  
のさよふ心をさるるまのり一節の心のちとれ  
もいやる一

愚考 百合をゆをよるころ入るるまのり  
まよハハもの花よりうらこりす

子やさのむその子の母を故の嘆む  
成美曰万まよよ山上曉良おらら筆を今  
をまのりさるるむ子さるるむまのり母を我を万  
はらむのさるるよのりこ

愚考 二條院の所金賣吉次末春とりよ  
りの所り真剣より京都一毎年上りさるる

つれなき昔人のちるるさるる

↑園や地虫さるるの際のおるる  
愚考 海衡日地蠶化肢蜻折脊出而る  
蟬さるるの意を↑園をまハ濕気 ありて  
出すさるるのさるる

一書よよ母虫鳴よよ花よよねさるるさるる  
さるる我を夜さるるいねてせとまは

日の号やま、くまて異さるる牛の舌  
漁村云山城園宇流那系と大津の所一里塚  
の西の筋さるる

愚考 竹を六十年ありて花咲きを結ぶ

さ竹則枯りし有りけるをそまよふはあら  
て言さき三空人をも恨りて叢生する丹あり  
維んをまよふはく石系畑畔るくふはる小竹  
有り決りて大竹の十年枯りてそまよふ  
夕ふ事や岬並りしるくもの暮  
愚考岬を秀山之雲の暮の言く低く  
まよひまよふを元山の歌よまよふしるく  
終夜林修きまよふや裏井や  
一書ふ加賀の全昌寺を大層の城外に  
有禪ありるり芳良を夜毎に別道  
てまよふまよふしるくまよふの吟く  
寺ふ止常ありしるくまよふ

又月や六月の夜まよふ  
愚考候裏抄曰詩文章を修りて夜庭ふ

晒すゆふ月とりま古今俳諧歌六首の  
夜の歌よていしるくまよふ心をもよふ  
一書ふあつて阿方の川原をまよふやわらわ  
祖海をまよふことまよふの吟るり近路の白粉  
目のまよふよりまよふしるくまよふの川を  
まよふしるくまよふの境をまよふまよふの境を  
まよふしるく

合款の本のまよふもまよふ星の歌  
一書ふ曰朝後拾遺集よまよふ七夕の夜も  
うらまよふまよふしるく一夜のうらまよふ  
らむ合款をまよふしるくまよふまよふ  
あひて眠るまよふまよふまよふまよふ  
のまよふまよふまよふまよふまよふ  
まよふまよふまよふまよふまよふ

散秋曰後道交窓伏合欵安ふ木いってその  
多ふあつてもいふとるなり 愚考の植物記ふ

日合欵一名 夜合和心志一合人欵示安  
ふあつてもその葉あましむいといふとるなり

手をかけおらそむり木槿下  
愚考の源氏夕歌の巻ふ咲花ふうつら

てふあつてもはつめとむをそめてさうきさき  
の朝うかまふをそむとこまをりけははも

おらハ槿花一日葉とあまはその一日を  
おけておふふをそむと又ふささるうとて

そらしてあつてもはつめとむをそめてさうきさき  
をらしてあつてもはつめとむをそめてさうきさき

愚考の急補人の歌の心をやあふゆくね  
とも子をあつてもはつめとむをそめてさうきさき

果もるるきい芒原ふりうりて東西をさ  
うーなるふをそむとその心すふは子の歌の  
心ふをそむとてなり

君のふも交うるうー花すき

愚考の日又味をそむと目えんととのるこ  
知七も去来う才 是すて送りのあつても

ふりなるうー源氏ふ尾花ののりうり  
出とふをそむとてさうあつてもはつめとむ

新撰万葉ふ 林日遊人雲遠方道  
遙望外見 芦芒 白花 揺動似招袖

疑是 酴生 任氏 芳 又古今集ふ林の  
花のふの枝う花すき 勢ふ出てふ

袖く袖と見えゆくと  
いはくふらあつてもはつめとむをそめてさうきさき

太笥白山家集ふいにほくみつるつりて  
てふつてき伏むと折りふりけしき及芝の露  
相のあふうはくもるる蟻の肉  
一書ふそ名あふ後成郷自撰秋夕ふまを  
聖多しの松竹身ありみりてうはくふり  
係子の里は冬ふ子の裁入之

病序の夜をふりて菘藤小

愚考 白氏長夢集目困病くま隣病  
鶴精 祢不換翅翎傷 乞病丁の依例之  
心さんやま甲の下のまろくす

一書ふま多田の神社ま八懐まにか列  
小松岩より一町斗南の道の傍ふあり  
実盛まき秋夜別当と号し生國裁花  
丸屋よりの十町まろり北長畝村の産之

蟻 蟻類ふふ屬し後ふ平宗盛ふはふ  
ては藤系よりて戦死す又実盛の 蟻 入  
のふむとらんやを秋夜別当としてけりそふ  
二日月ふ 蠶のあふふをふりたり

公名曰食物本草ふ曰 蟻のあふの類のふ  
日本よりより有りやふは 蠶のあふを本物  
ふのあり魚よりとまき 都てふの魚あ  
目んてふてふ目んをふりめふのふあり目ん  
あふまて海産ふあり 日没しして今を  
ふしと浮きり時三日月の照をて見して  
ふと弁らちまきてあふふをふりてふあり  
か葉の諸志ふふふふのふら  
うらふこのふよ人のあふふの社  
の神壇ふふりてふふふとや

月新や拍子ありあて 膝の上  
後物曰撰集抄よ曰そののふつづのふま  
法りちり連ちりありふいふ世ととののま  
後ちか後の社よまありちりを年一ちりな  
つてて白國のりて修りしちり又修り  
まありありのやと仁安三年十月十日の夜  
まありて幣とまありて抄屋の社の  
りてありて静入法籠ををりちりふと木の  
まの月かのりしとちりよりちりまありあ  
あまらえとまありちりちりちりちりちり  
ちりちりちり又いれりいとありよちり連  
愚考抄屋の社よか後の抄社あり日本  
紀よ曰持統天皇四年正月皇后即位  
あり公卿百官列位連連り許奉り拍手と云

周礼九 洋の注よ曰拍手 兩手相打く

新不うーたふさ見送る朝月夜

愚考六條ふちりありいさくちりあて  
製利ありすよちりありての玉のち  
はくちり判刀免てありてありてありの言  
ちり判出んは一きい警るりとりとちりえ  
ありありのり判刀をいさくちりとり  
ありありあり

月法一抄れりちりちり抄れ上

一書ん抄れり宗る本時宗と云一遍上  
人を祖とす無智抄現の告よ依  
て徳國を修りし決定往生六十万人  
の札を流人ふあり本寺を相刻こ  
岩澤山法清光寺とりよ巡國のら

を任職とて本山上人を隠居する  
二世上人他阿まより代り他阿上人を  
号す一世上人気比の明神より泥濘を  
あふりて社改小砂をまゐるあり  
代りの例と守系治の案を門の弁を  
木履をとるきう一持物の持多のし砂  
石をあふりてりきこと守気比又六首飯  
仲衰を皇行宮の造りて則帝の  
美をとるあり尚國の一宮あり舊事紀より曰  
二月幸角鹿則興行宮而後之是謂  
首飯宮

このころ夜の月も見えなくなり世も送

一書より祖徠曰於子を甥のりて信正と  
しあるあり人の公卿の子なりと云

を養ふ叶ふやうなる事とありて  
愚考礼檀弓より足牙の子を於字とありや

物やありてきこふと云ふは

成美曰和漢三才名書曰鱧<sup>カ</sup>鱒<sup>カ</sup>魚形色似  
粘而口闊其尾有小岐有聲如蛙鳴人  
捕之哀声如曰五紀と又似曰岐之雀氏  
食経鱒音客和名曰知々加布里以輕  
而有黒点也 公石曰きこふを俗より蜂與  
とりし驚きサツリ我信濃よりてきこふと  
りし此魚鱒と似て針ありと云ふは至て痛  
はより鱒をとるとして物やありて  
きこふをきこふと云ふは  
りあるきこふあり一つの附きあり享保  
中積り股洪水の後更みきこふあり



その後徳のせりるはたをくしとるる又  
寛政の末よりきこくうりありそいひ  
傍正の妹の小玉れきあつた  
一書ふ云彼花山傍正のうけつてそめ  
のよよ并てたつりまふもふ小玉のきこふと  
まつたえまじり

一戸や夜もやうり 詔 近

愚考一戸を南朝飲ふて盛恩より十五里  
かと下りり牧を花牧庵 設 菟野 等  
まゆ 宇重 物後 一ふちのくめ 詔 近 二十言  
とりふ九二百里の行程るまは 夜もやうり  
とるり

田舎間の存縁さう 夢の家

愚考田舎間を五尺八寸の厚さ一尺

六分京間を六尺三寸厚さ一尺七分三  
分 端方六尺六寸厚さ一尺八分を  
野間とより吉野より用ふとる  
禁中七尺厚さ二寸各横を以ての半あり

此のわらわりの旅のあま

成美曰古今集きのよまて早苗とつり  
いはらのすよ編美をよまて林のつり

非田系

新すき大名をよまはり

愚考の故は秋のるすりの拾遺集ふあはる  
しやしるる人の子を古き并て  
ちるめいなるいなるいなるのこり  
ひるひつりと皆田舎の初めは  
成美曰非田明非系神大己貴命を

人皇四十五代 聖武天皇 天平二年庚  
午鎮座 延文年間有故合系平将門  
灵云 愚考北系五代記曰能系と云  
るは神田の神と限りとるは由陀宣と云  
我朝も能の始るる地神五代天照神  
の天の岩戸よ入るる一町八百系神集り  
て胡倉一神楽歌を奏し一多  
以来之をよよて能式之書と云ふは  
予翁と云ふ天照太神千歳曆を春日の  
神三系申雅之住吉の神と云ふ  
あり是皆神代の事あり又從宣小  
我氏子といふなり新神を云ふも  
能の舞樂より志らんと云ふは毎年三月  
十五日神子能阿のと云ふ御りよ上松家と

小系家の合戦よよて大永四年神子能  
おろしよりよを例して隔年の系礼  
ありて今よそのゆへ系八幡よ暮松し  
りよ舞楽能の考阿の此人に戸よ下  
りて居住し一年よ一度の神事能  
を片よよ今よおろしりて云  
さして白のさる法候方より系礼の舞  
固を仕りし行列を花芒といふなり  
ま出の林の文やゆへ不ろし  
成美曰病源備曰風瘰癧一名癩癧人皮  
膚虚為風寒所折則起也和名加佐保  
路之

塩魚の歯よとさるるや林の書  
一書よとさるるはさるるなり

梅咲て人の怒の悔あり  
芝山曰梅花悟入師之柔和忍辱心より  
てり小の怒の悔をたれり

梅の息や山路猿入る犬の去似

一書よ高岳よ入人犬のぬしとりつ子  
詞を取て高岳を梅の名西と 愚考

蘇子瞻の詩よ上畧山人醉後鉄冠落

溪女笑時銀擲低我來觀政同風俗

皆云吠犬足生驚但恐此翁一旦捨此

去長使山人索莫溪女啼此溪女を

上獨よ比諭して梅の息よゆをえ

し佐るる一い片違ふあむくも奪胎

撰骨の白法るるり必定せり

梅の息や山路猿入る犬の去似

成美曰碧巖之隔墙見角使知其牛

初賦や骨るる牛一力よも梅の息

一書よ八重梅の枝を香ら梅もあや

あり梅の本意とすり香を法苑よ先

らして瘦てさうくいさし疎の死よ

きさるるき妙よをり一みあり死よ

くさるるき妙よをり一みあり死よ

花のたつてりよはききして樹台よ

あり

此子良子の一ゆりうめの花

一書よ信よたふらことりよ太神宮の神

熊よ奉仕すり小女あり伊勢神宮の

子良物忌と称す社家二十八家あり

その暇をりて神宮をりて梅あり

一書ふ梅の本 希ふまじハゆりしとす  
らゆり梅を 清浄潔白るりの花をれを  
梅をよめてか婦貞女ふ比すりり詩歌  
るるよよくありるあり 成美曰坂士伝  
大祚玄系詣の記 一云子良として知推  
のをとめのいすこ夫婦のわらもあらぬ  
の正膳を梅よふ急用よして石作り計こ  
祚 為よりるありぬまハ二十三十おては月  
事るり 冥監よそむきめまじハ十一二  
もせらるるさそまじハ則職を詩す

入相の梅よるありぬ ひときこ  
成美曰暗香浮動月黄昏とる梅の  
ありて林和靖の句ありきまじ  
あそたらまじの梅ふむすむしるあり

藤くらりしき窓の細目や雪の梅  
才雅曰ひとりぬり子のまらるのうはり  
あそ根の梅の自ふるありるり詩歌  
よりのや

百八のうめてまらるや雪のうめ  
時秋曰百八の鐘の数を法行無常生  
滅法生滅滅已寂滅る樂法はるの文  
をる夜更夜ふかて一夜よ二十七宛  
撞とり別百八煩惱を滅せむあめ  
数るあり 愚危思ふよ百八の子こ  
冠りよ並るるそののひりけのちほよ  
赤染の傍の家集よ鐘様の侍をて  
よめ後のそとてふてあそをる  
そまじらふかのかよ入りやあそらむ

独寐もよのき寝くらむはつ子日

愚考 民家宜忌録よ曰正月を独寐と  
いむ月有りひとりの寐違ハ必不祥を招く  
もの有りといふ止るを好む違ハ伏魔を  
床よ違ておしるよりさ違ハそのう  
初子日とある違ハよのき寝くらむと思つ  
るう心又五雜俎よ曰止月上ノ子甲子  
る違ハ癸年丙子る違ハ早 戌子る違ハ  
蝗虫 庚子る違ハ叛壬子る違ハ水ノ云  
時をくき一未ぬ夜とる違ハ穰  
愚考 空也の違身 神鼓を 奏申五羽の  
二昧場を夜行す未ぬ夜をまゑ氣よ  
るまハおんろるうり  
うらやまーたむい切付猫の意

去来抄曰翁の曰心も俗情ありものひと  
くい口よ出れといふるあり一う違ハ冬種  
是よありて本懐をあらハきり是より先ふ  
然人々名は方よ言く人のめてけやす白  
多し忘り違ともまふいりてさーめて  
本懐をあらハる守とるあり 愚評 猿蓑ハ  
祖翁の精撰ありて忘りも七部の内  
うらやま 花実全うして序ふさ一自  
筆よ書ありて吟味をそり多のる  
集るるふらり悪評の白を入りよ  
一きい謂る一 去来抄の梅いり覚え  
有り 雑ふけ白本紙を定家卿の  
うらやまー世をま忘りのり猫の  
あらしむさるー入春の夕ら違祖翁 猿人

を樂りあり則 定家郷をおせりらふ  
うありと陳するいやは定家郷の  
ありと陳するいやは定家郷の  
台法ありて始と終と態を交ぬる  
くりりありて意味ありの状あり  
えん心人去来あるの著言あり  
るの連綿曰もあてりりりり  
る情の本体をもよく見ぬいて  
用残り後令に他のるを参り  
用心しておめよ程する尚この  
あつたりぬ

いとゆきのいとあつちと虚本を  
愚考 虚本を枯木ありりりりり  
芽の出るる前ありてりりりりり

のげりや紫胡の糸のうす 曇  
一書よ云一本よ紫胡の糸と書りりりりり  
非るり紫胡を糸のうすありりりり  
系拵よ新しのを拵りりりり  
愚考 本尊曰得風不揺无風自動故  
一名曰独揺 妙糸ゆよの目もゆも  
るを連綿ハウこく一こく一必伸もえ  
はく一一名ハクタクと云 独活花も  
白く美あり花よ大毒ありんね  
城のあり一夜露あり葱のきす  
古連曰ギが葱の花あり人丸の  
をるたり一ひ一夜露ありの裁入  
萱子小端流ひ一往や通  
愚考 萱を皆亡跡ふのひより

莖を何やらよ日或一人一人の子を失ひ  
て夢を望む一夜の夢にその夢よまの  
草をとりとりの夢にほのぼの夢に  
の舟よ舟よ舟の夢に夢に夢に夢に  
す舟よ舟よ舟の夢に夢に夢に夢に  
よむすふふふ此の夢を考へて  
胸をすすむの夢に夢に夢に夢に  
祖孫を夢に夢に夢に夢に夢に  
うはぬ堀川百首よ昔の夢に夢に  
を夢に夢に夢に夢に夢に夢に  
して右尚書の夢に夢に夢に夢に  
る古池集水鏡の夢に夢に夢に  
木瓜助旅して見よ夢に夢に夢に  
愚考夢の目よ木瓜の解夢の夢に

一はホ子ワキ草とりよ旅すの夢に  
此は夢の夢を徒よす夢に夢に  
夢の夢を徒よす夢に夢に  
愚考夢の夢を徒よす夢に夢に  
夢の夢を徒よす夢に夢に  
のす法を徒よす夢に夢に夢に  
よす夢を徒よす夢に夢に  
一はハを徒よす夢に夢に夢に  
愚考我の夢を徒よす夢に夢に  
夢の夢を徒よす夢に夢に夢に  
を徒よす夢を徒よす夢に夢に  
人と徒よす夢を徒よす夢に  
夢の夢を徒よす夢に夢に

愚考の初る義楚六帖よ曰明相出時  
得食粥午前得祓 午後不得食粥  
祓律曰非時者午之後食之と云六帖  
よ四ツ八分なり

類考云々一花よゆり祓の歌

一書云曰小大君岩檜のよりのちきり  
そよそよ一云ゆりゆり云きりゆり云の  
祓此詠よよりの一云主の祓を美目  
ゆりゆりその人らららら云一傳云  
ハのくすのちのちのち云と云云檜の  
さう云ゆり云花云の山云の云物云  
て若檜ら後小角の彼祓よ檜造ら云  
一故事なり

一里を路花るの多録云や

一書よ曰上東門院を良の八重檜云を  
つきよ云一勅あり云ハ傍侶大よ懐云  
いる云ハヤ云門院甚云う云ハ云ハ云  
とら云伊賀云余云檜云を云  
花壇の底と改て檜の料よ附せら  
ま云とる云世終りの云曰云  
一云八重檜を云を云を云  
案式類云元次云を云を云  
一云ハ云ハ云ハ云ハ云  
て則取次云ハ云ハ云ハ云  
何らの云ハ云ハ云ハ云  
のハ云ハ云ハ云ハ云  
そよ云ハ云ハ云ハ云

何の傍の檜の云ハ云ハ云ハ云



成美曰に談抄曰玄實傍於都を辭  
すり時きつ國を山水子しりし  
き君の都をすりしつらるる事  
是

嵐とすも夏の夜の事連そ花朝

愚考乃朝を和名抄よ由波 并代卷曰  
天照大神脊よ十箭の朝五百箭の  
朝を肩と云く武用兵略よ曰空穂を  
矣を盛物るり空といふのよ穂を付  
しり 俵囊抄よ曰楠正成の製すり字よ  
宗と書片ろるるを言わくしり又よふ不  
の文字廿四通書方あり 宗の略す  
大考や吉野の朝の朝の早  
愚考花も朝ありしやは獨書の心を  
えりしをい麓くしりしやをさすめり花も

朝ありしりし朝の山をさるるしりり  
乃灌や花も朝を代を冠りか

一書よ曰乃灌を太田持資入道源頼政  
之裔文武の才士あり文昭十八年源兼小  
て討死す年四十二やいりる事あり  
愚考乃乃灌を判髪の号あり和歌ハ集  
系三十六歌仙の一人ありて世人忘りしと  
探干よ夜しり花の立すり

愚考乃宋書曰宋の武帝の女壽陽公主  
人日含章簷下よ所梅花公主の額の  
上よ落つ五出の花を成す是を挿し  
とて去らん自後して梅花粧あり  
源氏の娘をえりて立姿と信るる藤  
染の摸字ありし

焼くものさうきくは花はちりすか

愚考の心宝鑑曰積穀帛者不憂飢  
を積る徳者不憂凶邪るもの縁を考  
ふふ家を焼く可きものさうきくは  
花のちりるもまじいさうきくはちり  
さうきくは花の盛るもあつて冬騒の  
人のさうきくのさうきくはさうきくを忘  
るさうきの冬雅うらやまうきくの  
一説は花さうきくしてさうきくは家をやけ  
ても大さうきくしてさうきくはちり  
りさうきく狂人のみ法あり

花ららや伽藍の樞をど

芝山曰瑯琊代醉曰伽藍を梵語なり  
唐人の翻して釋迦舎とりは樞を扉のキリ

るりの文選之注曰樞戸所以轉而開閉也  
字彙曰戸軸也入相の以らるる花の

海棠の花を満るり夜の月

弁地曰十四日の月十六日の月さうきくを  
愛するものさうきくは十五日を換へ夜の月か  
まはち満るり

さうきくはちりるさうきくはちりる花

一書はたさうきくはちりるさうきくはちりる  
さうきくはちりるさうきくはちりる花  
さうきくはちりるさうきくはちりる花  
さうきくはちりるさうきくはちりる花  
後紫宸花下漸黄昏  
そのまの石とさうきくはちりる

公石曰言の存ふるりしるるを概系の  
系し生食を摺墨ふおらましるるを  
ありし阿波國勝浦に死して石と成  
しし此るる義仲をうらむせめておめし  
とらるるしをとしるる白意を  
しし義仲公元暦元年正月廿一日粟津  
より石田為久を討

新妻をあふみの人とをりみたり

先注し曰尚白り新し道江を丹波より  
新妻より年よりありしりしりし  
はちいりけりたりや去来曰尚白り新  
しり使ありし先師曰古人も此國の  
妻ををすりたりおめしし終るる

愚考尚白も守りるの遠人さやうなる  
是を孫をりしりのみもあつたやうなる  
著言を待りうけひりむやまふなりし  
とを折付たり夫木集ふ赤路もを  
しん強はをしむるういはくしりま  
ありし此不うまの初より皆東方を  
さしてよめらるる古今よりあつた  
杖入るる肥後の根本能堂の七尾の  
を是れ任りまき皆をを方角よりあつた  
小兒もあつたるるをを是等も吾等の  
説と謂らるる一書よ澹齋云云り  
りのりの先達の説を拳らるる  
も和歌よりて連歌よりても上よそと  
りし抱字なりてり必しも是れは白ハ

きためて多りのある一し引くと多くなるとして上へり引くと多くなるとして返らぬとりよるもさしやうと見る如き一云流しよて多りのある別て面白くたもるる事と云う 一書よ上よをたとえぬを引るといふまは此の事人とりをみんものそを除くものあり 愚考をこれとて多りと答ふる者ししき和歌のあつらゑあり俳諧も十七文字又も十は文字あるとよて多ると多てそハ強しとするも早きてよてその流るりの初まとい彼の人多技の人とすししちんおちるからる東方よ縁ある道に人となしみんらやと云ふも感歎のこゝを合むる是

所歌の多りよと先よありよ是齋を考ふよとらまはさる。そと響ふるも早きてよをたしちりよと連ハ出そ道は詩歌の方より俳諧師を文盲なりとらしあゆみをさうり社を有連三十一文字と十七文字と押するての語彙全く字ゆりまはさ余情と云ふの意味とをさうむらけらりおそとせよ一して引くと多しとと数引くとおそ一して引くと多しといふ一して引くと削るの歌いちし挙ふよいとちあつらひ和歌のうよとせよと抱一するしてよめのも粗あるをよして況や僅十七文字の一百よたそをらや又云人とそをしみんるとを全体

意りちりふなり信濃なるとてやしり  
あふりよけの初より別をさすりゆきるを  
近江の人と俱ふをすし心のさる事ハ混  
す愈りて夫近年ハ城よりとりり  
一子とてと成りたりとすりを云後存の  
の癖素よりりと成りたりと一  
てふらんりとの字のきふいこい五美  
止 聲りあて娘の世とを成りたり  
信濃とてとをさすりたり  
与近江の人とをすりたり  
意伏倒なり

和不成る事と申の悪うなる

代花とさしりたるの一語

又さるものなを花よりしと一ツあき

とてハ略なり赤鐘をさる溜りとの字  
る事ハハゆらるるとの字義ありたり  
うくの如し西上人の昔あや山花のさるり  
よるりのさるりやさるりのさるり  
雲とりのを古款えりて狂歌歌林小  
吉原も花のさるりとのさるりたり  
しを流るりたり又信濃のさるり  
とやうら菊揚とるりよるり右のさるり  
さるりもよ成りたりとのさるりたり  
あり此和のさるりあり又すりたり  
とるりハのさるりのさるりあり  
とるりおの終りてりりりりりりりりり  
ハ系信よ成りりりりりりりりりりり  
りりりりりりりりりりりりりりりり

考の根を刷ぬるの志を遂  
一しつきの考の末葉を志すなり

古往よ曰は服を不白の羞をとりぬる  
有りといふく凉体曰考も根を刷よと  
はくらのつきの白有りといふ  
考をとおるし一するこ考を志よ柘の根  
をいといふる他考よあやまゆり孔雀考  
の類いつれも考をいといひて考よすむ  
その考の根をとりはる大切よ刷よ上よ  
考の考の時考をいといよし刷よとい  
一八余の考を白梅と白の中よ其考の  
て考考も根をいといふらあ考  
考の根をすすまは白のさげも考  
考の考をいといふらあ考

何れも考の考をいといふらあ考

里の考をいといふらあ考

一書よ小大考よ入山伏の年の日よ柴  
灯とりよ新の考をいといふらあ考  
考よ新の考をいといふらあ考  
八里よえ初てと考をいといふらあ考  
考も考の考をいといふらあ考  
と年の目入有り考よ新の考をいといふらあ考  
考よ新の考をいといふらあ考  
つきぬらあ考  
愚考の目考上人金考山  
考よ新の考をいといふらあ考  
考の考をいといふらあ考  
考の考をいといふらあ考  
一書よ此考をいといふらあ考

ついで蓬り入まらるる

吸物と先出茶をききしすいせむ

一書し小庵後玉水善寺より水泉池清あり  
言出ふるなり

ばまきも盧同く男者なりなり

一書し小唐の詩人よりて葉紙を書きし

人なり盧全の名ありなりゆりのよみて葉人の  
隠考と見えし

藤をよりて車ひきくおむ

古住し曰夕秋の家の侍なり 成美曰

源氏夕秋の巻よみまきをを壺やとて

侍りていとよむいむるわきまなりやりの

ちやめえましくわくつきき人な侍りてあわて

おと〜あ〜してと〜い〜出〜のりヤ〜ひき入  
ておりのま〜

柴のやや蕎麦めするまて紙をよむ

風谷曰古今著聞集よ云流木真傍於武

のともありあり家の畠よまはをを急て

侍りて或夜盗人の皆引てえ〜りなり

とゆつてよあり終ぬ守人を長袴たを

名〜ららむそををとりてそ〜し〜はさ

つらららるの以大盗人よ袴 岳保捕と

りよりのありるゆるよ長袴とるよの

る〜む

ま〜ららの雲のす〜 赤き〜

一書し入踏鞠の〜ありを雲と見え夫  
を赤きと虚し〜るなりと云く

愚を考りきやうしるむをりしきさるりよて  
るりし多と良山の平多のあきさを隠居よ  
してまゝるる白るりあきととりよ字小目  
を付し一次の白るりその格柄の場を  
定めて鞆作ると傳はり

石心のあきりる花の伝をむ付

一書りよか後た赤門ま氏森心してまぢ萱  
石心とり酒喜のあきり盃の中一伝不みの  
花のあきるるをえてしを光を暗りしを傳へ  
魚の骨志あきりまその志をえて

物人入しし 曲門の 後

立りり屋敷をさふす女とよ

陽あきし竹の箕子とよし

古住小日物人の道し一を世のえの傳

有りしと云く 又古住よ日浪化云今人の傳  
借よお強等を利かりし 去来日記  
有りしと云く一巻よ一二台あき不し  
舟の中よ待人入しし小曲門の種も門を  
のあきりしは集積よ時あきりしあきの  
白あきしとて 糍結よの白を伝へて  
入りり云く 後美日深氏未摘花の巻  
よ種のを伝へりあき伝へては  
のいしひあきしきそしつてまゝるる

愚を考り古住よ人入しし小曲  
門の種も門を伝へて  
のあきりしは集積よ時あきりしあきの  
白あきしとて 糍結よの白を伝へて  
入りり云く 後美日深氏未摘花の巻  
よ種のを伝へりあき伝へては  
のいしひあきしきそしつてまゝるる



あゝあゝさうのさきハ獲のあはれなりとね  
 ていそくさきハ獲のいこいけきかいてき  
 する源款のりよらうららの雲をそり  
 人もおろく人あつたおまの袖うらま  
 きめのるうららつらまらとおす  
 まふてと云ていけき獲の志をそ  
 とりよの侍るまきそそを引きてお  
 門の獲あつたおまのさうららら  
 けらあすすいあまのさやさけして  
 うの榮枯をさす女よとさると  
 末摘君をいとはさきとさすうら  
 まらおまをさすさきとさすうら  
 らけまらうらさきとさすうらら  
 侍るうら一後よおまの侍さきとさすうら

をそよおの獲あつたさきとさすうら  
 獲のりよら 獲斗をさすお獲の獲  
 らら利はさきとさすうら  
 らら居あ三百さきハおまらとさす  
 のら獲らら中へおまらとさすうら  
 しおまらとさすうらとさすうら  
 ハ獲のりよらおまらとさすうら  
 学舎よおまらとさすうら  
 命うれさき 獲斗のさき  
 古往よ日おまらとさすうら  
 中と獲ららおまらとさすうら  
 との獲界よおまらとさすうら  
 西行と獲ららおまらとさすうら  
 侍ららとさすうらとさすうら

古往小日西行<sub>ク</sub>能<sub>ク</sub>因<sub>ク</sub>野<sub>ク</sub>人の侍と  
けりえり 一書よ味多<sub>ク</sub>彦<sub>ノ</sub>主<sub>ニ</sub>を徒<sub>ニ</sub>小<sub>ノ</sub>侍  
卷<sub>ニ</sub>てはき<sub>ニ</sub>進<sub>ニ</sub>美<sub>ニ</sub>ぬ<sub>ノ</sub>月<sub>ヲ</sub>をすなり一<sub>ノ</sub>卷<sub>ノ</sub>を  
と<sub>ニ</sub>む<sub>ニ</sub>ま<sub>ニ</sub>は<sub>ニ</sub>く<sub>ノ</sub>人<sub>ノ</sub>の<sub>末<sub>ニ</sub>を</sub>を<sub>い</sub>と<sub>ニ</sub>名<sub>ノ</sub>中<sub>ノ</sub>略<sub>ノ</sub>社<sub>ノ</sub>因<sub>ニ</sub>  
西<sub>行<sub>ノ</sub>の</sub>徒<sub>有<sub>ル</sub>ニ</sub>む<sub>ニ</sub>あ<sub>ニ</sub>る<sub>ノ</sub>侍<sub>ノ</sub>西<sub>行<sub>ノ</sub>の</sub>心<sub>ノ</sub>  
引<sub>リ</sub>く<sub>ニ</sub>被<sub>レ</sub>法<sub>所<sub>一</sub>年<sub>ノ</sub>あ<sub>ニ</sub>つ<sub>ニ</sub>可<sub>ク</sub>の</sub>侍<sub>ノ</sub>ふ<sub>レ</sub>い<sub>ニ</sub>き<sub>ニ</sub>  
そ<sub>リ</sub>り<sub>ク</sub>る<sub>ヲ</sub>あ<sub>リ</sub>く<sub>ニ</sub>於<sub>レ</sub>る<sub>ニ</sub>撰<sub>集</sub>方<sub>ノ</sub>と<sub>寄</sub>  
思<sub>ふ</sub>子<sub>細</sub>も<sub>あ</sub>ま<sub>進</sub>ハ<sub>令</sub>よ<sub>う</sub>ま<sub>進</sub>し<sub>キ</sub>  
侍<sub>ノ</sub>の<sub>有<sub>リ</sub>ト</sub>と<sub>被<sub>レ</sub>侍<sub>の</sub>ハ</sub>一<sub>ノ</sub>途<sub>中<sub>ノ</sub>マ<sub>ツ</sub>テ</sub>  
出<sub>ラ</sub>ル<sub>レ</sub>ハ<sub>ノ</sub>その<sub>徒<sub>も</sub>白<sub>中<sub>ニ</sub>よ</sub>等<sub>ノ</sub>つ<sub>テ</sub>ま<sub>ニ</sub>  
こ<sub>レ</sub>え<sub>侍<sub>の</sub>の</sub>推<sub>辱<sub>の</sub>所<sub>の</sub>り</sub>え<sub>ル</sub> 愚<sub>考</sub>  
成<sub>不<sub>ト</sub>と</sub>豫<sub>念<sub>の</sub>侍<sub>も</sub>あ</sub>す<sub>り</sub>又<sub>レ</sub>比<sub>無<sub>小</sub></sub>  
あ<sub>そ</sub>こ<sub>ニ</sub>見<sub>ゆ</sub>也<sub>と</sub>て<sub>西<sub>行<sub>ク</sub>能<sub>ク</sub>因<sub>ク</sub>と</sub>ハ<sub>い</sub>  
ぬ<sub>レ</sub> 去<sub>來<sub>ハ</sub>自<sub>分<sub>の</sub>白<sub>有<sub>ル</sub>を</sub>野<sub>ノ</sub>人</sub></sub></sub></sub>

の侍と寄えいといふ鴨立<sub>ノ</sub>伏<sub>ノ</sub>の秋<sub>小</sub>  
寄<sub>テ</sub>吾<sub>妻<sub>よ</sub>り</sub>の<sub>侍<sub>の</sub>の</sub>思<sub>ひ</sub>ま<sub>の</sub>侍<sub>の</sub>一<sub>ノ</sub>  
あ<sub>そ</sub>る<sub>ヲ</sub>る<sub>ヲ</sub>る<sub>ヲ</sub> 因<sub>レ</sub>く<sub>ニ</sub>ま<sub>ノ</sub>あ<sub>ノ</sub>く<sub>小<sub>書<sub>の</sub></sub>  
う<sub>一</sub>ふ<sub>ア</sub>く<sub>ニ</sub>ま<sub>ノ</sub>あ<sub>ノ</sub>く<sub>一</sub>く<sub>ヤ</sub>西<sub>行<sub>上</sub>人</sub>  
言<sub>盤<sub>山<sub>よ</sub>ら</sub>ば<sub>ん</sub>と<sub>一</sub>時<sub>後<sub>藏<sub>卿<sub>千</sub>載<sub>集</sub>を</sub>  
え<sub>ら</sub>る<sub>ハ</sub>あ<sub>し</sub>と<sub>寄<sub>テ</sub>年<sub>も</sub>あ<sub>る</sub>よ<sub>あ</sub>ま<sub>進</sub>れ<sub>ニ</sub>  
歌<sub>と</sub>も<sub>書<sub>の</sub>は</sub>は<sub>め</sub>て<sub>あ</sub>る<sub>ト</sub>て<sub>花<sub>も</sub>も</sub>  
ま<sub>の</sub>葉<sub>も</sub>も<sub>ま</sub>と<sub>の</sub>は<sub>ら</sub>く<sub>の</sub>い<sub>ら</sub>り<sub>や</sub>あ<sub>ら</sub>  
と<sub>君<sub>ひ</sub>ら</sub>と<sub>あ</sub>ら<sub>の</sub>む<sub>後<sub>藏<sub>卿<sub>法<sub>歌<sub>の</sub>あ</sub>ら</sub>進</sub>  
あ<sub>ら</sub>る<sub>を</sub>感<sub>して</sub>より 阿<sub>の</sub>歌<sub>も</sub>も<sub>あ</sub>ら<sub>く</sub>  
入<sub>り</sub>ひ<sub>テ</sub>その<sub>あ</sub>る<sub>ハ</sub>一<sub>よ</sub>世<sub>を</sub>す<sub>く</sub>く<sub>入<sub>り</sub></sub>  
あ<sub>ら</sub>の<sub>あ</sub>ら<sub>の</sub>葉<sub>の</sub>あ<sub>ら</sub>進<sub>も</sub>あ<sub>ら</sub>き<sub>の</sub>い<sub>ら</sub>る<sub>も</sub>  
あ<sub>ら</sub>る<sub>ハ</sub>あ<sub>ら</sub>の<sub>是<sub>時<sub>後<sub>考<sub>將<sub>院<sub>文<sub>治<sub>三</sub>年<sub>の</sub>侍</sub></sub></sub>  
あ<sub>ら</sub>る<sub>撰<sub>集</sub>の</sub>二<sub>字<sub>を</sub>撰<sub>集</sub>あ<sub>ら</sub>る<sub>思<sub>して</sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub></sub>

一 不ゆりのも 汝ら建ハ是未此續小近  
く正さるまハ能因のさういよしお不つ  
あ般一

るく金とさうま一十れさうま  
ふ代持くさりのをさかしく子目して

一 書小十の孟を平生の酒邊よるあら  
はとえて子目の松を六階くう 成美曰  
西行家集子代持くさりのをさうくうあ  
はめつや君のよまへ人のあはしく金さ  
愚考文徳実録曰 天安三年 二月禁中  
有曲高預之者 不遇公卿 近侍數十人  
昔者上之申 必者此事 時謂之 子目然  
也 松といふは一して二百ありいさくあり  
近きん一き後ありの文

金鐸と人ふ呼ぶあ一身の安さ

一 書小月連の町人の並ふくちなき派利  
りして 結搦仕りの腰の物をきくらめうす  
その侍見らるらぬ一 世よりあ名を金鐸  
しと名をまられくあり 一 書小法彦の  
侍玉のちより只今少城をよと使成し  
らさるるの山意小入の侍よて金鐸と吳  
名を法り一あり

何をみるるも法ゆをうりあり

花とちる身を西急うあろもあて

木弓の蹴蓋ふはゆるもふ事法く

一 書小西念を法然上人の弟子之羅有  
刑をらる 一 書小例の親妻の体之世中ハ  
何をえても 只法ゆをうりあり 何を二の

露のやうなるなるなるのよすといひ心  
ふれて西急と稱するなり次なる木草の  
蹴草もすえくする修あり 愚考はゆき  
くりといひふ無考を執りてある花の  
親志有り西行上人を尊称院上北面文  
武の達人俗名 漢といひ世跡をなす  
年を悟り保延三年八月家出して北山  
西急のゆきよて判髪附ふ年二十三と云  
西急寺を行基の開基今も専念の修志  
をなす西急寺ふを附とめころ梅  
さうりあり意密ふうときも人を附ふを  
よき茶臼はゆはうりといふを八月よ  
八月小白雲の花あり花とちる年二十  
三西急のありもあてとる西急の衣体

をうふむのそききハ西行なるる眼  
あり木草の蹴草ふまふははくといふ  
西行の寂をさす貝原本草踏の記ふ  
曰大井大久年のる西行の墓あり西行  
坂といふ蹴草を一首の合をよて木  
草をいむむとめゆ梅あり西急を  
法然上人の弟子ふて何を附白の  
まことといふする西急の名を世よふい  
る布といふものをもこのくををす  
住者の心いふ見朱あり西急の名書  
藉ふありまをさるるも七八くあり  
蹴草のりを成美曰下学集飲食門  
壘スイクキ蹴草をま菜ふ蹴草をく  
まへて二十日とぬる寸納足のまをく

白み引てねこり出つを飯の上よそ  
喰ふ木弓後島の松く山嶽山の道よそ  
するるなり方俗スンキと唱ふすいそ  
を女命花中の種砂石集よそ出さ

何抄のい 子 狼の ぬく

夕月夜島の萱根の取 願すり

人志事し 春そよよの 水

愚考思ひ 暮を八雲山抄 不露子を  
ゆふ道歌 匠抄集よそ 唐古よそ 二人の  
女を埋し 暮よりけしを子をいふ又  
暖涼あまの原の忘き子をよふし  
をみまへし又つむじををり  
系 橋 腋 一 ちいふ 咳ふ けり  
ま 三 月 何 け 不 け ぬ ぬ

古往不花を橋不何し又橋ふちを  
ゆ何し橋をゆて花とすら猿籠  
よ一白ゆりし初心の事あはれぬ  
ちりいと 一書不此自の花をこ  
名人の業ありし今時只去感  
のあて花をゆせこの又奉白の曙て花  
不城のと終ハいりゆて花り  
さゆりしるる何し先師秘花の  
愚考思ひ 獨云 不日花を橋花といふ  
てきく 不花よちし 不木ハ  
不及し何し何し何し何し  
ゆりやと海く花水入しきりよふと  
道年を橋をゆて花すらすり  
やよふしゆて花りし何し

半歌仙の花をささく梅ふすうの歌云歌  
川の癖をささく又花を揚句一志不き一族  
希代の花より多罪のふけりなり一志  
歌仙の花二つちのうらな花をすうの歌既  
ふ歌花を百款ふ一々所なり又歌を表  
ふ引上るふ子細多二の表三の表各の  
表ふすうの歌を傍手決身なり初表ふ  
花をすうの歌一余美なくを外三やうて  
ふす一四白めより下へ出すを占今ふ  
例なき控を度やそを近一年五白め  
七白めなるとふ花をすう族のゆるを古今来  
るうの法外く又歌仙ふ花二本出せ  
しうのうらな花ふりとさる故なる一  
二花三月を定法なきことと他の花の香の

歌ふ成るふ小心の法うなゆつうや花三  
本見ゆかもあるし有しそ不覚歌のま  
るり月花を一歌の的踏ふ花をささく  
大切のものゆふ名残の花ふ香を  
ささくささくをささく忘るるうことよく思葉  
をささくして考ふ一竹小日花の香を  
よめて連歌きは花歌譜をま歌と譜佐  
す一心以大切のうらなは一字歌歌  
の意有りとは梅の歌をそ花ハす連ととも  
花の歌をそ梅をささく古今の法令と更玉  
刺祖孫の金云のましくしく自己ふ歌  
譜をそ知まると抄うらなはうらな  
を則歌なるの歌うらな一有り  
梅の葉をささくこの歌のとあけ汁

一書小法の事所謂之は切なり梅小の  
葉の色をまじりて赤海を吹吹一口小  
云の事しるの感傷少なり云々

とてまじりて紅くして下さる事小なり

成美曰三才易云曰今云稷園子之類  
古者祭多用黍稷今則以糯糞又和名  
粉糞之度岐祭儀之又字法拾遺云云  
志とてまじりて一とてまじりてこれハ  
愚考神なる名目於聚抄曰糞米を蒸し  
て鶉卵の如くおしよせて斤木小盛て神前  
小供へ

稻の葉延のらりらるる事

愚考新の白と萩の白とる五白の  
白葉の如くしてまじりて

内義政の如くといふ類の 於鹿山

古往皆曰西形の侍と寸去来文小曰  
此の事小西形をわたりてよせらるる  
て小又西形の侍をわたりて於鹿山  
うき世をよそよそつり侍ていふ事  
ゆく事か身事なり  
愚考此又侍更  
よ心なりといふ類の白をまじりて我々の  
めく事なりといふ事なり  
侍投とあちちとちちちにしてまじりて文  
侍なり又世上の説よる内義政とを  
虚名なりといふ侍とをいふ事  
ハより人を定むる悪しと云といふ事  
ハより侍の海なる事なり

るくして内務政よりなるべきこと既に既述す  
其後等とてをいひしよりその事にして附句と  
らゆへに族の御徳あるを承るる事建長  
の法を祀ふ日二首苗代の水より傳り  
て見えゆへに二極をその雪の林の枝に  
うけし御徳山とて古里抄りて其の  
善政のす急よ御徳をその御りよはうに  
指の筆のひのるよすりりて御心の傳  
ありきゆへに御心集あり又御よ鐵の  
とを別其の御り傳るるより必定るる事  
後又し續命の山に上りて十向その時  
不被の國より不毛を其の御るの祀といふ  
二夜よりそのはるよしてわらるる事  
御心の御り傳るる事とて急を其の御る

次の佐古長御り身の事いを傳り時  
て御るるをその事を其の御りあうことゆへ  
よ附しつらる事建長の御り類聚國史  
曰任知茂祭主詠永檀内務政云云を神  
武天皇以来祭主を是の御りて百非を  
奉らしめりよと其の御り身の御り  
御りて其の御りよ承し内務政よ任すと  
あるゆへよ加茂の縁を承りて内務政と  
うじりひ又御徳を其の御りて其の御り  
うさぬ御りよ其の御りよ其の御り  
して其の御りよ其の御りよ其の御り  
ひして其の御りよ其の御りよ其の御り  
一一人の曰其の御りよ其の御りよ其の御り  
やうふり御りよ其の御りよ其の御り



つゝ海防の記及びの記を併行しよせ  
よ致るをきめ有り隠念今个向すおと違有  
類聚国史よりよく叶つて足跡あり致し  
子房集あり西行よ撰集ありありきめ  
あり心集あり皆その集の不致の跡を  
うりてその人の付をききしきハ後より  
げらめし物そうしよ一々記やきりし  
も致廉よ西行の致ありしとして西行と  
いふありきしきしきしきしきしきしき  
を東法なるの大國よりて昔より致し  
人夫西行のみり

所刻の箕ふふ藝ふ小西方  
すふきり松の志のりるなり  
一書ふ子のるし訓を思ししきのし

星宿陣法ふ箕陣あり又一説は旗を  
とよみりて方篇を略すとありしよ  
らんと云々 無味堂曰小西行其の家  
巨小堀内義政とりしりの技能し  
未ゆの致ありと云々 愚考は曰維  
南有箕載翕其舌又史記曰君臣  
斥絶不和箕為教客又史記正義  
曰迷惑犯守箕尾氏星自生 芒角  
則有幾陣之事ゆふ幾場の状あり  
きしきしき 箕を望漢之切ケイ居之之  
切キきしきしきとよむし 索隱曰宋均云  
箕以簸揚調致為象又箕受物有容  
来々客之象也 箕星の危くしきしき  
内義政を技能の侍とて君臣斥絶不和の

象を附しりる乞箕の手に扱次の百八本  
のふら松とて花二のたを落しとあつり  
兼の札為の札よよするりて

去来又よ日乞を撰集抄の故よりんを  
中少とまき 愚案撰集抄よ日西行法師  
伝説玉依のやつりてをて細細あり  
よる字すこしこまきほつとゆる  
ひをえそまきこりまきよ落りらこや  
を弁るへしちを引だるを落としてす  
活つる傍あり落の肉よその字しよ  
紙よしてれををりりそのそのの札よ  
何り割とけり松の影のいの影とむ  
よまにしむのちのさよまきこり萱葉  
萩女糸花曰そ略す類の花うつらよ

の松をよふ下葉よまよしてははゆを  
ちりほく西行回て云いほくよるあり  
あふまやこりよ初まらてまのま  
よりとほりりまを落まののの  
とん又一町ほりり葉つりよ六千計の傍  
のうらまきくををためて職りゆふ急  
あそまよよこ本の枝よ紙よしてれを  
雲あつり曰葉の雲こり身よ一あり  
うまハすめり月をていほまてよる  
西行あそまよよあひまの雲くんと若  
そまハまの傍曰叶よほの心のやみ  
てらよまき一月おちや影く雲くれり  
と書きてまねるりり流りら町よ上人  
二人の身を皆ふる一歌よまのさつり

えをさめてき好く納め入ると云く考  
ものうしろをりてまの目ふき好く吟  
橋をゆりけるを思へ合せうを  
ほくさよふちり魚くふるを思

者うさよりの百衣の 一衣を

成美曰史本集曰すそのもろのりあそ  
すうし小倉より山の志げ弁おれりこよる

沙堂おさよふ かの海は

思考の籠籠云海遊志とを内海と云  
又瀬戸内とゆへはより九列地一りけ  
て内海とり入ると云く内海の波の満  
干空りありと云く三才集云よる見ゆ  
内海をり波の波はなり

わりとさよこし 無めり

大膽よ抄といふはまぬ意をて

公石曰伊勢物語曰陸奥の女をりてら  
ひ一夜ら手とりてまよし夜涼よま思ふつ  
女歌 剋のあそをきしはよま思ふつこ  
りけのまよしをりてまよしをりてら

小刀の拾ぬあり 細工をり

成美曰穢人を歌合よの波中りりもあ  
くはるる小刀のあよ一まきまのあま  
かりらむ

そくと海よわとあくとあまな歌

一勝曰あくとあまな歌とあくとあまな歌  
思考小工面のあまな歌とあくとあまな歌  
らわの等皆まくの字のりり

幻住菴記芭蕉州

一書小祖菴幻住菴の文を三通あり  
の一通は後抄舎小育宇の一通は賦之流の  
一通は猿蓑集より出

石山の奥、岩洞のうしろあり山  
あり國分山といふそのうみま  
ちの名を傳ふある一

愚考江列栗太郎淡田より石山を尋  
ねふといふ一里計幻住菴を尋ねし時  
之義仲寺の境内より流守玉を尋ね  
え正天皇養老五年勅令より流  
玉を建らるる初基を造り丈六釈迦  
の像を安置せり

麓小細き流をわたりて

翠微小宅あり三曲二百歩

ありて八幡を祀り

一書小翠微を山の半腹あり 成美曰

杜牧詩与客携壺上翠微 爾雅曰山  
未及頂上在旁坡陀之趣名翠微か

しこ小八幡の小社あり侍小推の本  
あり昔のよやとゆー 一書小山の

形の美あり小翠微といふ

非体は弥陀の尊像といふや

唯一の家より甚忌なりを

兩初光を和らげ利益の

塵を因しう志あり

き

愚考弥陀を傳灯録曰性情尸迦父之

各月上母之各殊務妙歌云々、西部本地  
弥陀垂跡應神天皇也、和共光同其  
塵界して和光同塵といふ

目次を人の指さるる事述ハいさ  
神と云ひの志のりる事傳ふ任  
すてり子の子ありよりき根毎  
新をこつ并御ねりり發露  
て狐狸御しとをゆるり知住  
為と云ひのりしの後ありしを  
勇士兼泥氏曲水子の伯父小  
る心傳りしを今も八年計  
むりしよりりて西よ知住老人  
の名をのりしとせり  
一書よ兼泥氏曲水通称外記 一書小知住

老人を膳所薩中本多八希左衛門六  
十余歳より卒寸探山居士

中又市中をさるる十年計  
ありて五十年やちりき身を  
成美曰付よ祖翁曰十七文拙取二年  
兼歩のみのをさるる極年の家  
をさるる事述

叔亭曰古歌二首みの虫のみのや失くむ  
百の夜を父よ母よと吟ありし家  
すてぬ心をむりし極年立より一くま  
らぬ世を事述

奥羽象傳の曇き月小面を  
ありしすするる事述ありし  
き少波の荒磯よきさるる事

中つらうて

意味堂曰能因法師志多とら波の  
うねしはくさひ有て阿ゆ弁らうしき  
六しの言漢 一説小異相象深の異  
き日と多はくうり 松島象深とるけ  
まはるゝぬを孝老のあや中らるゝむ  
と云く 愚考松修を五月の初よそ  
象深を六月の末より何そ松島象深  
の異き日とはくけ多ふたむや真列出  
相象深北海と一説しふきさみくら  
りのるり又異相きさくしと後強の  
拍子ふらうて又孝の老く感す一  
一相小異相を唇齒の玉りし  
細名と致をりまそとるり一異相

松修の象深とる相神の自性上等  
是よりの初住高の始末を述り  
今歳詠氷のる弁小をよむ  
雪の陰果の流連としある  
芦のむく本の陰ぬのり  
新婿 茨きあくく相招結派  
とて卯月のほいめいと  
うらそあふ入し山のやうて  
しとさご おりのそ弁ぬ  
一書小変本集 うらそさやあふのうり  
のいりてせすくわらそんこのむ  
らむ又山家集よりのやをなうて出  
とみりふ身を花らりるむと人やお  
らむ 愚考安若抄小時めらき果

そ流まのぬもの芦んそこ四本ありき下せ  
て集らん入るりいと云くせりたを史及集と  
りて蘇の文とりい皆流りせりふはく  
まらるるそ知りぬへー  
と子り小雲の名幾もをいしり  
はくしー嘆のそり山者およくけそ  
時多る志をりしるる程家りしそ  
の流りそ之のりを本流きのはく  
とそいとらりしそそそふ身して  
一書ふ支考文操西行の歌あり全久を先守  
ゆ俗久選ふ家りしそそそ燕るりと  
愚考平為喜終後の歌お後小判の歌  
小判をりしそ猿ふ中りそや新子らの  
家りしそとるりしそとそそむとそそハ

りしそふ家りの字を冠くそそそ汁をり  
のや又曰本流きそそ守屋の具のそと  
るりそ太子の流りあり寺を流き  
あゆしよ寺流きとりいとりい  
魏吳楚東南よをり  
一書ふ杜子美岳陽樓ふ登り得昔聞  
洞庭水今上岳陽樓吳楚東南圻  
乾坤日夜流  
身を浦湘洞庭より  
成美曰山谷詩小惠宗烟雨歸厚坐  
我清湘洞庭欲喚篇舟飯去故人  
是丹青愚考惠宗の芦原の名画ふ  
見とそそそ舟を呼ひつそハ朋友の云そハ  
画るりとりいよ警つるり湖氷東

南ふ流連さるふ心を籠へおのそん  
身をよみまひしと眺守方う引うけ  
らまひておのろあし

ふも未申ををららるる人家  
よきかとも満より南葉峰

よりのおろし

一書ふ家語ふ曰南風之葉方可解吾  
民之愠兮 愚考熏風復のゆるるりと  
事・文・続集ふのえげ又呂氏春秋曰東南  
のゆるるりの

山は海を浸して涼し日枝の  
山比良の言根よの唐橋の松  
をうすけあめて城あり橋あり  
物さうとあはるる言えふうよふ

本樵のふえ

一書ふ山中に事樵唱有時安の傍と  
愚考或りのふ曰本樵の序を本樵の唄  
をりふときまは此をうまのりふをりま  
あし樵夫の唄ありと知ら

替の小回ふ早苗とる秋草  
苑りふ文周のやふ水鏡の  
きくく美系物とくして  
ふりふといふ事あり申うま  
之上山を土峰の傍ありて  
武義のたき 柵もたふ  
出せらる

愚考三上山とる富士十名の一ツふ  
して巽山とりふ土峰十名の



ひくひくあり 歌不たむのさりし一の根  
をきき侍を ちうく之上の山の野の雲  
法印 堯孝

田上 山よ吉人をうそくさくぬ  
この嶽子丈う蒙袴賜とりしよ

一書 小猿丸太夫 又野世ゆると逢せしてその  
きりふすむ 淡美曰 無名抄ふふふふの  
下よそはうとりふ所りそそふ猿丸太夫  
の墓たりの底の境よそそこの書かよ書  
のきくこれえん人皆志あり 一書 小名集  
田上のきくふう嶽も志くふりし方やまゆ  
みのふふふふふふ後九条殿  
尾津の里をいとくふう後うそ

細代 ちりのそとよみむ万葉  
集の姿ありきり

愚案 かくるりのふそとよめり 歌万葉及  
新撰万葉ふりも文ふり久老麻善六美  
の云古万葉十四卷 伊賀の上野と  
やらむふりしつえ侍りより 昔小侍の  
りのちのまじはいすくくえぬたりやその  
中ふりもゆむむのとゆり

於能定ふりるむと後の巻  
ふ運のちり松の柳依り葉の  
をををををて猿の腰掛と名つく  
五味堂曰 旋斫松枝架依棚

彼海堂小葉をいとるの土簿  
寄小房を結る王翁徐

佳う後のるあり

一書小山山谷集徐老海棠果上王翁  
主簿峰庵住少云徐佳樂道隱於  
藥肆中一家有海棠數株結其上時  
与客果飲其間又王在人多採四方  
歸結屋於主簿家上嘗有毛人至  
其間同道愚考主簿嘗等と書る  
非あり主簿を官名ありカの唐名  
ありて江西の廬陵郡よりあり木客  
考とありは考より五品ありあり  
白毛を等よりを主簿とありは考  
の危形小似るを主簿とありは考  
りありの考とありは考とありは考  
山よりありあり

唯睡辞 少民と成て

一書小癖史曰李農老睡里を好み  
肩人と云ふなり小食強て皆棋を下す  
農老を輒枕小使きて眠ふ荒の敷  
局終る時一度展轉して云我始て  
一局あり公等幾局をとりし  
愚考冷齋夜話曰范堯夫小睡眠の詩  
あり五雅俎曰睡を嗜む者あり邊老先  
杜牧其介教人皆有此癖近世張東海  
有睡丞記又陸放翁睡癖の詩ありさ  
まハ并をさ守とありありあり

一書小展教多山の言き氣之 芝山曰  
王子瑞待小門若刺啄定佳客齋外

麝香好山 一書小東坡採衣步屐  
新

空山入風を叩て庵守

一書小石林詩話曰青山拍風坐黃鳥  
獲書眠云山居閑寂のきりりあり

一書小王荊公竹拍風對青山獲書  
眠北園

そまゝの心もあつる時を  
の清さを汲てみはくく  
炊くくくくくくくくくくく

一炉の燐くくくくくくく

一書小西行上人とくくくくくく  
岩の苔清あふ弁不すふとくくく  
すくくくくくく 成美曰山家集家集本

よえええ或曰小堀宗甫の歌う  
くくくくくく住々住人の結ふ  
心きく住々住人くくくく  
くくくくすきくくくくく  
るを満て夜の舟のをさく  
るくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくく山  
の僧正をか巻の甲斐あり  
表子まてくくくくくく  
いりりりりりりりりりり  
て額を乞いといやすくく  
をそめて初住庵の三字を送  
らるくくくくくくくくく  
一書にか巻の甲斐ありりりりり  
か巻親友

後本甲斐守敦重と号す斐安寛  
永の間の能書なり菴子未詳也  
稱していりや愚考孝白侍大及  
乞父康之菴父云々又菴君と云  
菴のイツクニあり

とらふて山岳といふは猿床と  
云さる器多くをいへるなり  
本曾の核笠越の若も兼斗  
枕の上の柱ふりけりるる種  
しととらふ人ふ心を動し  
何るを客する菴里のたのこ共  
入来りてるの忘りの種と云  
し糸の夏細ものなりと云  
秀竹志ぬ菴後日既小山

の習ふる事

一書小雲谷雅詠先晦菴野人載酒  
来農後日已夕古古又菴集より  
夜坐静小月を傳てハ款  
を傳て灯を亮てる同所  
是非をさるる

一書小夜坐不厭湖上月 一書小莊子  
舟物悔日同所同系曰曩子行今子止  
曩子坐今子起莊子曰義曰同所  
彰邊之然落者此時是非結彼之  
喻也

のくりてえとていふる小閑  
菴をぬみ山帯小跡をい  
くさむとらるる

病身人ふ倦て世をいと云  
し人ふ似たり情年月の  
う世なりあし抄子身の料を  
おりふふある時を仕友を命  
の能をうらやみ

一書ふ翁を最堂家同苗仁古書門友の家  
長杉尾基士郎と云陪従の小身る建六  
官舟をうらやみありしむ一うらうら  
てふは佛額祖室の庵ふ入  
らむとをしむふくうらうら  
ゆ雲ふ身をとせめ流るる水  
を骨しして繋く世涯のたりり  
あしきさるる道ハ流るる無敵を  
才ありしてはひききとらふあり

空味堂曰惠能禪師吾三十而窺佛  
額祖室 一書ふ曰佛頂禪師子冬  
しして禪を少しし字好しりと夫  
をも余ふしし終ふ世末のるしとて  
紀傳の一もたらふはるうりて生涯を  
終るとしうり

樂天を五勝の林をやうり  
老社を獲しり  
一書ふえ模寄 樂天祐ふ志遠佳  
康惟潤帳 兩地 各傷を限祚  
成美曰小夜の康覺ふ云良基云樂天  
しり云し人々終久少弁を片く  
らきあるゆふ心をくささてわく  
よりり心むのう弁をらしと待みあは

くらしき竹あり 一書小孝白賜杜甫  
版頼山頭逢 杜甫頭戴笠子日卓  
牛為同級何太瘦生只為從前依  
待苦

賢愚文雙のひとしあうさる  
よのたきさか幻の柳さうけや  
とひのちかたけりしうしめ

一書小海鏡注曰謂互尚忠尚尚  
雙因尚文

先このむ教の本も者な本立

一書小源氏推り本の巻ふいり多の木の  
まをさやうさる海のむく竹さむとサ  
ていし人まらげり多のむくさうさる  
いなるまをさやうさるまらりいさうさる

てふとげの弁そさうさるおさうさる  
おさうさるおさうさるおさうさる  
さうさるおさうさるおさうさる  
いをまとげるとさうさるさうさる  
おさうさるとれりおさうさるさうさる  
うげとさうさるおさうさるおさうさる  
とこふさうさるおさうさるおさうさる  
さうさるおさうさるおさうさる  
のむとさうさるおさうさる 一書小教  
政の推をさうさるおさうさる  
非さうさる

たのひさうさる紙帳さうさる

芝山曰司る温公の布衣の然るさ  
よのひさうさるよのせさうさる紙帳の然る

あつむつと身つゝり又小説小白鄭  
度好書苦紙て急急ち楳の柔を  
贈へて是ふ書きて樂しむ侍のふ似  
つり 愚考家隆卿云の紫を考の  
ふ書ふ上書はげつたふおらまはるの  
やふゆりまはるはげつてをり

教や葎の中の花うつき

愚考白氏文集葎室中有美人常  
織絹罽帟市又字苑ふ日教八眉る  
のるるりカホバセト訓す

あつむつと身つゝり又小説小白鄭

愚考源氏もまあつしトタトルるり  
句入言曰蹠躡るり字彙曰緩歩の形るり  
膳亦米や早苗のつけふ夕涼

愚考山王受礼の供御を忠守ゆ急小膳不  
淡とりしセシヨの切つそ連をせとよつしるるりあや  
一あつむつと身つゝり又小説小白鄭

愚考之を大坂の人山城のそり相田の  
麦粉を古産とすりのるる土産を我  
玉の産物をとるすす(そ連)ままは古今集  
よ律の玉のるるあつむつと身つゝり  
とらふよあつむつと身つゝりあつむつと  
玉をとりもるる物をとりもる山城のそり  
あつむつと身つゝりあつむつと身つゝり  
賞均てとらふあつむつと身つゝりあつむつと  
の御膳は新よあつむつと身つゝりあつむつと  
あつむつと身つゝりあつむつと身つゝり  
一あつむつと身つゝりあつむつと身つゝり

愚考新氏要覽曰僧家四月の寺  
を以て結念とて安住九十月七月  
を以て解念とすやるるをの猿  
藤すきくも九十月れるる山小善くして  
おんすくむと書音ふやらるる

女立や猿の臭の一志きん  
愚考力サを良香なり 磬と書一  
あつらふらうとて法をあらつて磬

明季録生初曰唐

云やあつても果は声のいつ

愚考任控てとての窟をまて思  
ハを心一ヤのきこりては是は  
年終の窟出るるを思年のころる  
声のいれみふめをわけとて

あまきん

### 猿養者芭蕉翁滑稽之旨

韻也

愚考史記滑稽傳考物云滑稽酒器  
也言出口成章詞不窮竭若滑稽之  
吐酒也ききハ滑稽を妙をなり  
ををりなり 成美曰韻字彙与響

同也字典云唐堯神人賜有韻在  
坐執事為宮在亥中 愚考猿養

の一句を六窓一猿の名吟とて首韻  
と書る非なり 首韻也

非比彼山寺偷衣朝市頂



冠笑只任心感物写興

一書小漢室担戴鵲冠笑朝市金

圈狙偷衣感流徒六の外猿の説

洛下逸人凡兆去来随

翁遊学棋鼓竹窓躍等

凌節斯有歲屬撰此集

玩弄無己自謂絶起孤

腋白裘者也

愚考孟嘗君の狐腋の白裘

直子金有りて天个彦歎ス人ノそを

幸娘ふあつて秦の囚を逃れ

かとの名求衣有り王褒曰子金之裘

一狐之腋よりあつては担戴の猿籠ハ此

名求衣の純起すりとは人の狩りて

云天个彦歎の白裘小踏まつりとは

如何言て曰千疋の狐を殺して一人の

寒氣を乞ふは乞名園有りて宝とよま

すりよ是らけ猿をまふ列之人間の

兩具をりて猿ふ名をあり仁情何

日の福よあつて有り又ま裘ふ籠

をそを合せつりる子疋の狐の腋中の

毛を縫あをきつりるを子筋の字を

よりあつて一籠の形と有りを文

感よ絶つりるを連ハあそ偷衣頂冠

の笑いよ比すりよあつてはと有り

於是四方吟友憧こ往來

愚考シウ憧シウくを初て絶々ら敢るり  
或千里寄書く中旨有佳  
有日蕴月隆各程文章  
然有昆仲強士不集録  
者

愚考昆仲オキニツキを昆仲昆を兄するの仲を伯  
父する昆アハとナリ詩六惟然等を子手昆  
を兄弟するの仲と素堂法徳無倫亦  
を子手昆の友人するの昆等の友人  
を比集小の昆と昆オキニツキ又昆伯オキニツキは  
の昆仲オキニツキと昆オキニツキ又昆伯オキニツキは  
索居窳ソク栖キ為ニ雜ニ通ニ信  
愚考居を索ソク栖キを窳ソク寸小文書  
通ソクとキとキ雲水斗ソク藪キのソクとキ

且有統倪婦人不琢磨者  
賡言細語為喜同志雖無  
至其城何乘其人乎哉

愚考統ソクの年暮るの倪キを年暮るの  
初心の寄りして同志の存樂多し  
其ソクの至らぬといふも控キと  
果分四序依六卷故不違  
廣搜他家之文林也

愚考四序四季有り四時有り以上四巻  
仙一卷知住庵の記共六卷有り文選  
注入張鏡云宗ソクの親教多し  
聚人台ソクの義有り又法苑珠林曰涅槃經  
を鹿苑の宗ソクの義有り又法苑珠林曰涅槃經  
の義有り又法苑珠林曰涅槃經の義有り

叙論よ思へ合せて歎号五義の温奥ありきを知りて  
維也元禄四稔辛未仲夏余掛  
錫於洛陽旅亭偶會北来吟席  
見需記此夏題昏尾卒援毫不  
揣拙庶幾一襄高張有補于詞  
海漁人云

愚考維字彙曰凡策書の年月必維字を以發之  
敗る時の高字あり稔る穀一契の義小  
元と昏尾る書尾るりの王元之曰大張一  
網羅群英



